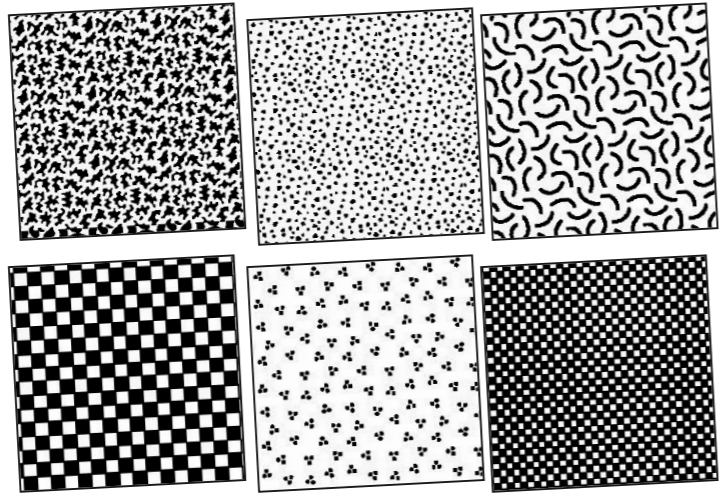

月 刊

MéLange

Vol.161



2021.4.25

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.161.2021.4.25

「月刊めらんげ」編集部

◆ 帰郷希望 詠

岩脇リーベル豊美

菰野なる画廊の帰り 秘湯浴み
Nach einem Thermalbad
Besuch der Galerie in Komono

伊賀の城に 初夏の小文の風雅とも
In der Burg von Iga
Frühsommer-Kurzsat
mit Anmut

伊賀の山深し 忍者の曳く列車
Iga Gebirgstiefe
- Ninjas Zugfahrt

難民の恋愛に観念論ちれぢれ
Liebe eines Flüchtlings:
der Idealismus zerbricht

足で書く句に夏靴の気持ち
Ein mit den Füßen geschriebener Vers
ist gefüllt mit den
Gefühlen von Sommerschuhen

夕月の肥えて浜にノルマンディー
Der gemästete Abendmond
geht am Strand auf-
in der Normandie

詩・俳句・短歌

- 帰郷希望 詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美 3
- 逝きたまふ母 (短歌) ……北夙川不可止 4
- 蚊群れ……………中嶋康雄 7
- とめられない想い ……にしもとめぐみ 10
- ころんじゃった ……野口裕 11
- ウミウシたちの失敗 ……高谷和幸 12
- 内航する眼球……………大橋愛由等 13
- 落下ソネット ……大西隆志 14

評論

- 連載4回目 / 「想像力の彼方」……………大西隆志 15

連載小説

- 4回目 / 「海猫堂店仕舞記」……………千田草介 6
- 4回目 / 「海に見える丘」……………高木敏克 8

連載エッセイ

- 益田っこ通信 59号「もう5年目、まだまだ5年」……………元正章 3
- 神戸詞あしび 149〈排耶書〉に込められたまなざしを考える……………大橋愛由等 16

編集部日より★82 / 今月もひきつづきコロナ事態の現状を報告しておこう。4月下旬のいま、コロナウイルス感染ピークの第4波が押し寄せている。隣地の大阪府では特に患者数が激増。経済圏が同じ兵庫県でもコロナの変異株の患者が増えている。一方でコロナワクチンの接種は遅々として進んでいない。欧米諸国よりワクチン導入が遅れているのは、もはや人災といえるかもしれない。 / オリンピックが開催されるかどうか注目が集まっているなか、地元・兵庫の地では知事選挙が7月18日に投開票される。5期という長期にわたって知事を務めた井戸敏三が引退する。10年間副知事をつとめた金沢和夫が立候補を表明。ここまでは、兵庫県知事人脈の〈王道〉である〈東大→内務省=自治省=総務省から天下り→副知事→知事〉の流れを踏襲するかと思われたが、齋藤元彦・大阪府財政課長が、兵庫県議会議員の自民党議員の一部に押されて立候補を表明。さらに維新の会も推薦。ここで「波風立たせぬ大人の県会」を維持してきた兵庫県の保守陣営が割れてしまった。自民党県本部が、党本部にどちらを公認要請するか段階で金沢を推挙したのだが、それを県選出の国会議員たちがくつがえし、齋藤を公認するよう党本部に申請して認められた。しかしここで本音を出したのが井戸だった。金沢を「即戦力・実行力がある」という理由で推挙。ここにきて連綿と続いた〈王道〉人脈を堅持しようと立場を鮮明にしてきた。 / 4月の「Mélange」例会の第一部読書会の講師は、維新政党「新風」代表・魚谷哲央氏。「令和」時代における右翼運動のありかたや、天皇・天皇制についてなどの所見を話してもらおう予定である。(大橋愛由等)

◆ 益田っこ通信 59号

元正章

▼もう5年目、まだまだ5年 〈2021.04〉

還暦を迎えた時は、牧師となって5年目。古稀となってから、新天地・益田での生活が始まった。そして5年目の春をコロナ禍で過ごしている。あと1年経てば、めでたくも高貴高齢者の仲間入りとなる。青春時代の5年間と、いま体験している5年間との相違をふと考えてみるに、どこが違うものものなのか、いまだに未成年のまま、ほとんど変わっていないことに、思わず苦笑した。首尾一貫した生き方をしてきたわけでもないが、なんとかかんとかこまで生きてこられたのは、多分に儻倅といったものがあつたと思えない。「なぜ、あなたではなくて、わたしだったのか」と、問うには「なぜわたしではなくて、あなただったのか」と、問うにも等しい。そこに神の差配を感じる。あのとき……、「さまさまのこと思ひ出す桜かな」(芭蕉)。

5年目の春はまた、幸町自治会の会長役を仰せつかった。さいわい住むという町に住んでいるのだ。そのためにも、毎朝7時には、「みなが幸せであるように」と、平和の鐘を7回鳴らすことにした。その後、礼拝堂で、お祈りするのが日課となる。(夜も7時には鳴らすことにしているが、これは常時というわけにはいかないだろう) 山のあなたの空遠く、離れているあなたにも、さいわいの鐘の音が届いてくれればと、願ひ、祈る。5年先は、まだまだ長い。

「若者は幻を見、老人は夢を見る」(使徒言行録2:26)。夢幻という言葉があるが、幻と夢の違いは、いかに？ 幻想と夢想。老いも若きも、人生の三分の一は寝て過ごしているのだ。「果報は寝て待て」。

(編集部註 / この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏(神戸市出身)が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです)

◆逝きたまふ母

北夙川不可止

満開の花見て思ふ來年は癒えたる母と花を愛でたし

花散らす雨降りやまぬイースター母の快癒を主に禱りをり

花の散るけふの寒さに身を締め路地から路地へ猫を追ひたり

病床の母を見舞へり來年は花見に行かむところをかけつつ

はつきりと意識保ちて頷ける病床の母の快癒禱れり

病む母を氣にかけつつも爛漫の奈良の屋敷の探索にゆく

晴れわたる奈良南郊のまほろばの古き屋敷の薄暗き藏

病室に届けむとしてシヨパンなど母好みたるCDを買ふ

眠りゐる母の枕邊にプレイヤー置いてモオツアルト低く流せり

母好むモオツアルトを病室に流しつしばし語りかけをり

母のためモオツアルトとシヨパン買ひ風寒き午後病院へゆく

復活に肖らむとて見舞ひより戻りイースターオラトリオ聴く

石切の門前に寝る猫たちを撫でればはやも日の傾けり

石切に母の快癒を祈りたる父妹と蕎麥屋に入れり

晴れ渡る爛漫の春主イエスに母守り給へと祈りて過ぐす

教會に讚美歌うたひひたすらに母の平癒を乞ひ願ひをり

時折に話したきが見ゆる母にシューマンかけつつ語りかけをり

かき曇り春の嵐の吹く午後を吾がたらちねは死にたまひけり

吾が着くを待ちたるごとく急變し嵐と共に逝きたまひけり

妹と母の遺骸に付き添ひて春嵐の中實家へ歸る

安らかな寝ぬるが如き母の顔ただ「ありがたう」とぞ聲をかけつつ

母逝きし夜も腹は減る冷えまさる中スーパーに辨當を買ふ

眠るが見ゆる母なりその顔のその冷きに手を触れてみる

無言なる母に語りり在りし日と變はることなき聲の調子に

ディオールの紅さつと引き亡き母をいよ教會に送り出したり

桃色の棺に入れられいよいよに生き生きと見ゆ母の亡骸

一同に讚美歌うたひたらちねの納棺式の始まりにけり

歌ひしは『主吾を愛す』美しき母のかんばせ老婆に見えず

納棺の式の終はりて聖堂に留まる母に「また明日」と言ふ

母好む喫茶店にて芳しきカフェ・オ・レを飲む父妹と

生けるが見ゆる母なり紅さして櫻の色の棺に入りをり

ア・カペラに讚美歌うたふ友のゐる母の葬儀の和やかにして

ささやかに心の籠る式なれば柩の母も華やぎてをり

美しき母なり長き生涯を終えて靜かに横たはりをり

吾らには過分な母なり泣きながら棺に數多の花を入れたり

先に逝きし猫の名呼びて今逝ける母の道案内を頼めり

寂しきは拭ひがたしも再會を信じて母を主に委ねたり

骨となる母と目^ま見えて骨拾ふ生けるがごとく話しかけつつ

全て終へ蘆屋河畔を散歩すれば櫻はなべて葉櫻となる

花好きの母は櫻と共に逝く雨は上がりて細き月出づ

吾が膝に飛び乗る猫に母の死を語りかけつつ涙ぐみたり

教會の庭にピンクのカーネーション^ち小さく咲きたり母送る朝

母逝きてより寒戻り夕刻の散歩はコート羽織りて出でぬ

母逝きて四日経ちたり美しきもの見るごとに涙ぐみつつ

虹を見て花を見てまた涙ぐむ美しきもの見るはかなしも

海猫堂店仕舞記④

千田草介

「やあミロクさん、今日もごきげんよろしおますかいな」と、チャンドラが尻尾を左右に振りつつ禿げ男に挨拶した。

「なに用や、猫主人」と、男はぶつきらぼうに紙巻煙草をふかした。

「じつはこの男がかくかくしかじかで」チャンドラが私を一瞥して言った。

禿げ男は鷹揚にうなずいた。「そらヒコーキは二枚羽根にかぎる。低翼単葉なんちゆう邪道に陥って人をおおぜい死なせる破目になつたんやさかいにな」

「いったいこの裸のおっさんは何者なのかと小声でチャンドラに訊ねた。ミロクとは、釈迦入滅五十六億七千万年後に衆生を救済しに下生するというあの弥勒菩薩のことなのか？ 京都太秦広隆寺や奈良斑鳩中宮寺の半跏思惟像が弥勒のイメージだとは大方の認めるところであろう。いづれもほっそりと優雅な体軀、可憐な瞑想の口辺には拈華微笑がうかぶ。だが目の前の男の風貌はその対極にある。なにより腹まわりが太い。つらがまえもでかい。

「その弥勒や」猫が言った。「ただし菩薩というより如来」

菩薩は悟りをめざして修行中の身であり、如来は悟りを達成した、すなわち仏である。弥勒仏のすがたは布袋のそれとしてよく知られている。布袋すなわちミロクさんは、修行はひととおり終えているため酒も煙草も勝手次第である。京都南郊の桃山に仮寓して、ほど近い宇治の黄檗山萬福寺へ参じていたところ、時空をこえて神戸のここに居場所を移すことになったのだという。それにしても「どすえ」ではなく「なんどいや」の入り口にいるのはなぜか。

「もともとわしのホームグラウンドは神戸や明石やさかいにな。ここの居心地がええ」と、ミロクさんは言った。「猫主人にも、明石の子午線のとりもつ縁というか、文句いわれんと仲良うやつとれるしな」

チャンドラがのどをゴロゴロ鳴らしてミロクさんの膝にすり寄った。「ミロクさん、あいにく酒はおまへん」

「わかっとる。なんぼ食まがいの貧乏やとて、猫に酒をめぐんでもらおうとは思うとらん。山頭火は猫に餅をもろたそうやけどな」

私が知りたい複葉機のごとは、ミロクさんの背後の（なんどいや）の中へすすんでいくと判然としそうであったが、チャンドラはわが店の中ながら、ミロクさんにはずいぶん気をつかっている感じである。そんな尻に根が生えて動きそうにないミロクさんに一揖（いちゆう）して横道へ入った。

(つづく)

連載
小説

◆蚊群れ

中嶋康雄

電線がたるんでいる
粘つく残照
土鳩が鳴いている
すえた雨雲が漂っている
道路工事が始まっている
警備員が棒を振っている
バスが走っている
乗客ひとりひとり
蚊が群がっている
蚊が群がっている
窓をたたたく乗客
窓をひっかく乗客
ひっつきひっかく乗客
蚊の目玉が見ている
複眼の
複眼のおびたらしい羽音の
無限の
無限の
血を吸うこと
卵を産むこと
おびたらしい交尾
ガードレール
よだれ

沈む

羽音

信号が光る
自転車をこぐ汗ばむ女
追われている
対向車の走行音が
少しずつ化粧を剥がし
少しずつ呪文を剥がし
頬や耳朶に蚊がとまり
蚊がとまり
蚊がとまり
血を吸い上げる
あなたがた
血がおいしいだけの
あなたがた
むき出しの首筋
むき出しの鎖骨
むき出しの腕
むき出しの
牛蛙がボーボーと鳴く
アスファルトの熱が冷める
信号が点滅する
どぶの響き
欲望の過剰
月が照らす

4 影法師

あいかわらず弟は影法師のように、いつもわたしの後ろをついてきた。弟が森に入らないのは森の中では影法師が消えるからだと最初は思っていた。自分の影法師が消えることは本当に恐ろしいことだと思っていた。しかし、弟が決してわたしの前を抜かざなかった理由は違っていた。本当の理由は弟には影法師がないのだ。そのことをわたしに知られたいと決してわたしの前には出ようとはしないのだ。自分に影がないということは誰でも恐ろしいことなのだ。

弟が一度だけわたしの前を歩いたことがあった。「お前には影法師がないけど、本当はお前が影法師やる？」と聞いたことがある。もちろん弟は何も答えなかった。その代わり、二度とわたしの前を歩かなくなった。だが、どうしてもわたしの前に姿を表さずに背中張り付いている影法師の存在を認めるのはわたしには本当に不愉快だった。

弟はいつもいるのかわからないのかわからなかった。しかし弟は一生落ち込むだろうと思つて意地悪を言い続けた。

「うっとうしいなあ。もしかしたら、お前は僕の影法師とちゃうか。そやから、お前には影法師がないねん」

と、どうしてもいいなかった。それ以降、弟は影法師のように何も話さなくなった。そのために弟が本

当に影法師になったのなら、わたしは言つてはならないことを呪術師のように何度も言つた事になる。

泉の森を離れて峰のちぎれた切り通しの先にもぼつんと小さな丘があり、その丘に向かって鉄の陸橋が掛かっていた。陸橋の下には切通しの古い道があり、両側の壁はレンガでできていた。その神撫橋のある切り通しの先には空と海が開いていて、雨が降っても青いまま、空の雨粒は無数のガラス玉になって輝くのだった。切り通しを過ぎると、どこか知らないところまで行けそうな、そんな明るい道が空に消えていた。弟が一度だけ前を歩いたのはその切り通しの道の陸橋の上だった。

あの時も、みんなで影絵ごっこをしていた。それは夕暮れ時に橋の上に立ち背中に夕日を浴びながらレンガの切り通しの道に自分たちの影を映し、激しく入れ替わつて影だけを見る。それから、どれが誰の影なのか、当てっこする遊びだった。陸橋には欄干はなく、沈下橋のように危険な遊び場だった。橋の上を行ったり来たりしていると影法師が一つ、ドスンと下に落ちた。声もなく動くこともなく、そこには弟の影法師が寝ていた。

弟はばかだから、神撫橋の上で橋を見ないで影法師ばかり見ていたのだ。弟にルールを教えるルールしかわからなくなる。現実を見る力がなくなるのだ。

きつとそうだ。自殺をする大人は弟と同じだ。現実の地面が見えなくなる。規則という虚構に支配され、支配されていることも、自由になることも忘れ

て、自分がわからないまま、虚構のルールに縛られて自分が異常に重い存在になる。弟は知恵遅れだからそういうことが人に言えなくて、いつも影法師みたいにわたしに張り付いていたのだ。そして橋の上から自分の重量に耐えられなくなって落下した。今となってはそう思う。

影絵ごっこは本当に男のママゴトみたいな遊びなのに、そのルールだけで弟は橋から落ちたのだ。ただ、なんとなくゲームのルールに縛られて人は死んでゆく。きつとあの時からわたしには解つていたのだ。解つていることでも、それを言葉にできるには何十年もかかるのだから、沈黙が語り始めるのを待たなければならぬ。自分の沈黙も待たなければならぬ。そのうちきつと人に話せるようになるのだから、沈黙や影法師の人は諦めずに生きていかなければならない。

「わたし、とび降りる瞬間を見たよ。みんなが影法師と呼ぶから、きつと我慢できなかったのよ。影でない事をわかつてもらうには、ああするしかなかったのよ。みんながマサちゃんって本当の名前を呼ばずにカゲだなんて嘘の名前で呼ぶから、死体になるしかなかったんよ」千鶴子ちゃんが思いついてい

た。言われてみると、その感覚は幼稚園に入るときに入学試験で橋の上から突き落とされると言われたあの感覚だ。

川に落とされると信じてしまった自分はその瞬間が恐ろしくて自分から先に橋から落ちようとした。きつとあの感覚と同じなのだ。今になって、そんなことがわかった。

「あれは、影法師じゃないよ。まだ生きてるよ」千鶴子ちゃんが叫んだ。

背負っていた影法師が次第に大きくなり、やがて質量の闇となって巨大な塊になって橋から落下する。あるいは背負いきれなくなった重い影をわたしが脱ぎ捨てただけかもわからない。全ての生活を僕に負わせようとするものだから。

その時だった、森の闇の中からお爺さんが出てきて、坂道を転がるように近づいてきた。

わたしには、その時一つの謎が解けていた。やはりお爺さんにも影法師がないのだ。

「弟が大変なこと。もう動かへん」

弟の体にも影法師はないのに、真つ赤な影ができ

たみたいに血が広がっていった。単なる影だと思つていた存在が、しだいに重い存在になってゆき、岩の中の闇と同じような質量の闇になっていったのだ。弟はその重量に耐えられなくなって落ちたのだろうか。

それからお爺さんは何も語らなくなった。永遠に語らないのかもしれない。そういう人には一方的にでも話し続けるしかないと思つた。

「本当は、お爺さんは僕のお爺さんでしょ。おばあさんから聞いてけど、お爺さんは水夫長さんで偉い人で、船と一緒に樺太沖に沈んだのでしょ。でも、船長さんでなかったのだから逃げようとして、航海日誌を自分の部屋に取りに帰った。そしたら、船が傾いて重い鉄の扉が閉まってきて、足を挟んでしまったのだよね。それで、水夫たちを呼んでノコギリと斧で自分の足を切断するように命令した。でも、どうしても、足が切れなかった。でも、それは誰も悪くないんだから、許すしかないことだよ。誰も悪くないのには死んでゆくんだ」

わたしは泣きながら、お爺さんの足元を見た。山杖をついているお爺さんの右脚も杖のように硬直していた。

「お爺さんは足がないから、自分の義足を作るためにこの山に帰ってきたんですよ。だから、この山でいつまでもさまよっているのだ。それくらい、僕には言葉があるから言葉が教えてくれた。ねえ、お爺さんは僕のおじいさんなんですよ。だったら、僕のお爺さんを生か返らせてください。お爺さんみたいに生き返らせてください」

すると、お爺さんは弟を見ながら、とうとう返事をした。

「ああ、死んでしまった。せつかく会えたのに会ったとたんに死んでしまった。そうだよ、よくわかったね。おばあさんに教えてもらったのか。そうなのか、お前は賢いなあ、お爺さんはなあ、自分の記憶がどれだけ残っているのか確かめたくて、お前に会うんだよ」

「ええ、記憶が遺伝するの。そんなこと習つてないよ。でも、もし遺伝していたら、僕はもつともつと悲しいと思うよ。絶えられないほど寂しくて、絶えられないほど苦しくて、それだけで僕はきつと死んでしまうよ。だから、絶対に記憶は遺伝しないとと思うんだ。だからお爺さん、どこにも行かないで、遣伝じゃなくて僕に話して、弟とも話しておねがい」

「ああ、いいとも、お爺さんはいつまでもあの森の中にいて、お前たちを待っているから」

「でもどうなるの、あの森はそのうち消えてしまうんだよ。三ノ宮からバス道ができたから、あの森は消えてしまうよ。そしたら、お爺さんとはどこで会え

ばええの。あ、急に思い出した。これはおばあさんの記憶の記憶のかな、僕が聞いた話のかな、忘れてしまったけれど、あの森には記憶が詰まっているといつていたよ。僕は何度もある森に入っているから、こうやってお爺さんの話はもう僕に遺伝しているよ。だつて楽しいことも悲しいことも森に入ると思い出すよ。鳥も虫もそうなんだつて、鳥たちの記憶も虫たちの記憶も大脳がないから森が預かっているつて、おばあさんから聞いたよ。だから、あの森に行けばお爺さんにも弟にも会えるはずだったのに、あの森が消えるなんて、自分が死ぬのと同じだよ。あの森が消えると僕のすべては消えてしまうんだ」

お爺さんは、また黙り込んでしまった。

「お爺さん、お爺さん、そんなに泣かないですよ。会いつらくなるよ。僕が泣いても泣かんといて」

するとおじいさんは振り向いた。

「泣いているのは森だよ。わたしには帰る海がある。ところが森はどこにも帰れないんだよ。だから、森が泣いているわけだ」

弟は二、三日入院して帰ってきた。きつと、あのおじいさんが弟をよみがえらせたのだ。

しかし、よみがえつた弟は以前の弟とはどこか違つていた。おそらく、よみがえつたキリストにもブツダにも影がないのだと思つた。大人になって人の足元を見るのは、その人に影があるのかないのかを確かめるためなのかもしれない。

やはり、弟には影法師がなかった。

(つづく)

◆とめられない想いにしもとめぐみ

流れる蔓が
新緑を浮かべて
からまり 昇り
弾ける

小さな花を
無数にまとい
奏でるように
咲いてしまう

鼓動が 打ち付ける
鍵盤が連打される
叩き 叩きつけ
血を送り続ける

なめらかな肌を
這い ゆっくりと
あきることのない営みをする
重なる肉体

花を咲かせる
命の躍動が打つ 打つ
華やかに朽ち果てるまで
春の美神エロース

◆ころんじやつた

野口 裕

とろとろと下る砂利道の
ちよつと先どうしてか
じめじめ黒ずんでいるひとところ
湿りに続くは少々の水たまり
インク溜まりにも似ているが
これは何の文字も生み出さない

インクの染みについて
啄木が何か書いていると思ったが違った
葡萄酒だった

「書齋の午後」は
「われはこの国の女を好まず。」と始まって

「読みさしの舶来の本の
手ざはりあらかき紙の上に、
あやまちで零したる葡萄酒の
なかなか浸みてゆかぬかなしみ。」と来て
もう一度「われはこの国の女を好まず。」
と書いて締めている

だが啄木の好みを越えて
ちゆるんとこぼれた葡萄酒を
呑み込む存在もあつただろうか
どよんと小砂利かかえ
のつべりと底に泥かぶり
あるかなきかの風受けて
水たまりは
あくせくと文字のかけら探す
侏儒に
これはどうだと
波紋を広げる

◆ウミウシたちの失敗

——自切による自己同一性について

高谷和幸

個体であるウミウシと同じものがこの世にもう一つ存在することはない。疑いもなくもう一つのウミウシが存在するとは言えない。(a) 同一個体は同一個体である。自然科学においても、ミクロの物理学においても。(b) それがそうであるところのもの、つまりはあらゆる関係の下でウミウシと同一のものである。この同一性の公準はいつでも経験を超えるところにあるようだ。(c) ウミウシはそれが存在するところに存在する。この状況命題はこれを幾何学的な意味で用いること、つまり意味の転換において実際に起こることでもある。(d) 同一のウミウシは同時に異なった場所に存在することが出来ない。ライブニッツによれば、それが活動しているところに存在するので、活動のタイプを区別すれば同時に違うところに存在する。(e) 相異なつた二つのウミウシは同時に同一の位置を占めることはできない。幾何学的直観の条件とするところの個別化されたウミウシは位置決定による十分に分類された固有の物理学を明らかにする。即ち場の物理学とウミウシの物理学との重なり合いを認めることが出来る。しかし、狭義の物理学のみ有効である。(f) ある位置から別の位置へ移動するためには、ウミウシは間に置かれた空間を越えねばならない。移動する空間は公準における明解な弁証法的発展をもたらす。所謂眼は、指が机に触れるのと同じく、眼によって見られる星に確実に触れているのである。相対性の光学において、それが粒子である場合においても波動である場合においても、日常でウミウシが体験する光線と目の間にある間隔は、ある意味で極めて細分化された空隙に変わる。この相対論的幾何学は心理的に隠喩の体型を隠し持っていることを喚起しておきたい。而して、同一律の概念がこれらの同語反復の文脈の中にウミウシの物理学と論理学に適應するものが見られるだろう。(g) 同一のウミウシないしその事象は、同時に相異なる二つの観点から観察することができる。(h) 相異なる二つのウミウシの事象は同時に生じうる。またそれらのウミウシは同一の観点から同時的なものと見なすことができる。

◆内航する眼球

大橋愛由等

見知らぬ水たまりから声をかけられ
この季節の終焉を尋ねられるのだが
もどかしく答えられず
18分前に拾った風のかけらをみせると
そうじゃなくて、との応答
この都市まちの配線の一部に
ぼくとあなたはすでに回収されていること
樹樹に棲む鳥たちが
そこに安穩しているだけでは
次の季節が橋を超えられず
クジラの眼球でこの都市を視ないと
反転が反転を繰り返し
ひとすじならない羨望や愛が
このままでは橋を崩落させるのかもしれない

数え切れない無念や嫉妬さえも
夜蛾がむしやむしや食べてしまうので
西を向いて片足立ちしても
薄目で曇天にまなざしをむけたままでいても
ぼくとあなたがこの都市に自閉していることを
自覚しないうちに今日と明日、明日と今日を
鉛筆をころがして過ごし
クマのぬいぐるみを解体し
クラスたちに説論するため窓を開け締めして
屈折する光のまにまに身を委ねていると
双蝶が月のささやきをききいれず
都市の怪奇な言語装置を再設定しようにも
ぼくとあなたはこの都市この季節の文法から
逸脱できないないことを
覚醒するために
マンガオジュースを飲んだり
極楽卵をごくりと飲み込んで
いそいそ語彙崩壊がはじまる
縦糸と横糸あざなう
都市の細部に目を凝らしていると
夜蛾が誘蛾灯をこぼみ

いつのまに閉塞の路地から
失楽の風だまりを超えて
都市のあちこちに散在する
見えない境界石を砕こうと
解体したクマのぬいぐるみを置き
ぼくとあなたに対して
果てることをしらない
都市を内航する手立てを示し
クジラの眼球を手に入れるには
海を眺望する丘に登り
凧いだ海の日だけに
ほほいほほいと
なんどもくりかえし
さんざ転がした鉛筆で
樹樹の鳥たちの独語を
記述していけば
水たまりだらけ
単語だらけのこの地平を
夜蛾たちは
なに食わぬ顔をして
飛び去っていくだろう

◆落下ソネット

大西隆志

水路沿いをカメラ手に歩いていたのだった
いつだったのか、街に馴染もうとしていたのか
曖昧な記憶が古いチラシによって差し出され
断片をほどくのに必要な指先の力はまだ大丈夫なのか

一日中、溝をなぞって音を出していた日々
溝と水路との違いとはなんだろうか、流れるものがあり
夢から醒めない現実の尻尾を踏みながら
夜空に浮かび上がる星のレコード盤に沿って進む

やつてこない厳しさに誰が気付いたのかね
裏返しのことばは日常のはしほしほでばくを支えてくれる
事態は急に変わらないけれど細い糸には従わないよ

石を投げて落下する速度にあわせて時間を沈める
蓮池には折れ曲がった枯れ茎が夢の世をさししめす
死者たちの旋律は星が降るなかを上つていく

調べものがあつて本棚ではなく死んでる座卓脇の積読の書籍を調べていたら、山本光久訳のロジェ・ラポルト著の『ブルースト／バタイユ／ブランシヨ／十字路のエクリチュール』（水声社）が目についた。装幀が気になり確認すると菊地信義さん、惹かれただけはあると手にとった次第。山本光久さんは僕が詩を書く上でとても大事な方。実をいえば最初の自分の詩集を出す切っ掛けは、当時思潮社の現代詩手帖の編集をやつておられた山本光久さんと、詩人の荒川洋治さんとの出会いを段取りしてもらつた。どのような運びで思潮社に行つたかは、友だちの絵本作家の長谷川集平さんの一言だった。初めての個人詩誌『泊』（1977年10月刊）を出したこともあり、東京に遊びに行つていた時期で持参していた。長谷川さんにも渡したら、現代詩手帖や思潮社のワードが出てきて、それまで僕には縁のなかつた詩のジャーナルの中心地のような出版社で、あの三島由紀夫が割腹自殺をした市ヶ谷駐屯地（現・防衛省本省）と同じ市ヶ谷駅の近くだった。東京のポケットサイズの地図をもつていたので、地図を見れば何処にでも行ける自信があつた。当時、長谷川集平さんは絵本の革命児と言われていて、前年

この集平さんより、「せつかく東京にも来てるんやし、手帖を編集している出版社の思潮社に行つたら」と勧められた。住所とマップを頼りに新宿区市谷砂土原町の坂を上ると、小さい瀟洒なビルに思潮社があつた。小さな事務所だったが、詩集なりの書籍が廊下にもはみ出して積んであつた。この時に対応してもらつたのが山本光久さんで、第一声が「大西くんですか。詩は知つてますよ」と言われた。嬉しかったが、無名の僕なので不思議な感じがした。なぜなんだろう、と思つたが、理由は簡単だった。大阪文学学校の母体である新文学協会より月刊で出ている「新文学」に、76年6月号から頻繁に書かせてもらつていたので、無名の新人としては破格の扱いをしてもらつていたのである。この時の編集者が松田伊三郎さんと滝本明さん、それに川崎彰彦さん。とくに松田さんには編集後記でもネタにしてもらひ感謝している。この「新文学」の掲載により、それなりの方々に読んでもらつていたようだ。またまた不思議の回路が繋がりに、山本光久さんより「君は荒川洋治に会うべきだ」と言われ、荒川さんに電話を入れてもらひ、当時住居であつた神奈川県川崎市の家まで訪ねるように言われた。またもや教え

大西隆志 想像力の彼方に〈4〉

に『はせがわくんきらいや』で第3回創作絵本新人賞を取り絵本の世界以外でも話題になつていた。絵本の概念を変える作品作りにしても絵本論理にしても、既成のあり方に対してはカウスターの姿勢で、新しいものを創り出そうとしていたから、先達の人からは生意気にも見えただろうし、誤解も多かつたと思うので僕も強く共感できた。まだ書かれていない詩作品をどのように生み出すのか、生意気にも実験しているような時期だったので、長谷川さんの活躍は励みになった。それに、ギターやマンドリンを弾き、ブルグラス、ブルースなどの音楽にも詳しく、風貌も甘いマスクでロックミュージシャンでもあり、アイドルのようだった。まるまる一年違いで、学年は二学年の差があり僕の方が歳では上だった。高校生の頃から加古川から姫路によく遊びに行つていて、当時はイラストレーター・デザイナリーの岩田健三郎さんの周囲に集まつている若造だった。長谷川集平さん、弟の光平さんとも知り合いになり、その後はクラシック音楽に造詣が深く、レコード・コレクターの親父さん、詩人のお母さんにもお世話になつた。

てもらつた住所と電話番号のメモにより、その日のうちに荒川邸に行き、そして荒川洋治さんとの対面になつた次第。荒川さんも「新文学」を読まれていて、「君が大西くんか」と。最初の出会いなのに緊張もなく、どちらかといえばクラブの先輩に接するように和気藹々だったような感じを憶えている。僕の詩の師匠筋としては、勝手に小野十三郎さんと決めていて、それは高校生の時に衝撃を受けた大正期の詩誌「赤と黒」に集つた詩人の一人でもあつたからだ。メンバーの萩原恭次郎、岡本潤、川崎長太郎、壺井繁治などにも惹かれてはいたが、体質的に近く感じたのが小野さんだった。小熊秀雄、金子光晴にもあてはまるが、抒情への違和感を持つている詩人にこころ寄せてはいたようだ。現代詩なら、戦後詩からの射程をいけば、僕は古い世代の詩人に興味を注いでいて、荒川洋治さんらの戦後詩を脱却した70年代新鋭詩人世代とは距離感を意識的にとつていた。それなのに、荒川さんとの直接の出会いには驚くほど新鮮だった。

は「紫陽社」という詩のリトルプレスをやつていて、現代詩の震源地だった。そうこうするなか、「大西くん、詩集を出しませんか」と、思いもない言葉だった。自分の詩集などは頭にはなかつたし、発表作品もあまりないので、多分書き下ろしが主になるだろうと躊躇するなか、「出しましよう」と強くうながされた。出版の約束をして帰路につきながら、日頃の楽天的な性格なので前向きに進むことにした。それから、詩集に入れる詩を自ら選ぶというよりは、書き下ろしも含めてある程度頼まれば荒川さんに送ることになった。それなりの分量になり、詩集としての構成・編集は荒川さん任せで、僕は音楽アルバムのようにトルやジャケットを選ぶように自らの思いをお願いしただけ。タイトルはふと浮かんだ言葉だった。表紙は友人の写真を使うことにし、タイトルが決まったら、自らがモデルとなって、パシジョーケースを手にして後姿を撮影した。加古川駅近くの今はない路地裏の景色。なんとなく、リチャード・ブローティガンの「アメリカの鱒釣り」が頭の隅っこにあつた。こうして、初めての詩集「紳名で呼ばれた場所」（紫陽社）が出来上がった。ここには、永田耕衣さんの「出会いの絶景」があつた。耕衣さんは「人生は、考えても考えなくても所詮出会いであると思う。思うというより、そう決断している。生まれが、何といても人間との出会いは、人生終生の傑作にちがいないが、その傑作は、生涯を不幸にしたり幸福にしたりする個々種々相に富んでいる。大乗的な意味で、その傑作が、我が生涯を生き甲斐あるものにしてくれ、わが全人的な無限成長にケンかけてくれる手のものでさえあれば、その出会いは絶景というに値するのだ。このへんの消息を、私は「出会いの絶景」と独断呼称して陽気におもしろがっているのである」と。それと、最近読んだ荒俣宏著の『妖怪少年の日々 アラマタ自伝』の孫引きだが、英文学者由良君美さんが書いた平井呈一への評論に「必要な時期に必要な人に会うということ―それがどんなに稀有なことであり、宿命的なことであるか。生存の道の半ばを、とつくに過ぎる歳になって、いまさらのように思うのは、この感慨である」と、とても腑に落ちる。

神戸詞あしび

149-2021.4.25 大橋愛由等



スペイン内戦に参加した人民戦線派の女性兵士たち

革命において、アナキスト（無政府主義者）が人民戦線政府に入閣した（1936年）その矛盾がどうしても理解できなかった。スペインのアナキズムの実態はアナルコサンデイカリズム（無政府組合主義）であったといえよう。それは、まずひとつにバルセロナやマドリッドなど産業化が進んだ地域における労働者による工場の自主管理・運営といった太い柱があり、さらには農村社会における（親

戚の助け合い（ゲラン）に基づいた農地共有主義といったふたつめの大きな要素で構成されていた。こうした都市・農村の両面にまたがってスペイン社会に根づく強固な共同体志向に支えられた重層構造ゆえに、人民戦線政府が確立する時、アナキストだけの政府を企図するだけの幅広い国民間の支持と広がりがあったのである。人民戦線政府を誕生させたスペイン革命は、先に達成されたソヴィエト・ロシア革命が、「共産党の「一党独裁」「革命勢力によるあらたな権力機構の構築」がなされたことに対して、アナキストたちを大いに失望させた事態を超えるための壮大な実験であった。この意味でソヴィエト・ロシアの指導下にある共産党勢力と異なった、スペイン社会に根を下ろしたアナキズムは、国家という権力機構に頼らない〈絶対自由主義〉を確立することを目指したのである。ただし、スペインのアナキストが本来対峙すべき国家権力を体現する政府に入閣したことに対して、当時の西欧社会のアナキスト団体から非難を浴びている。この入閣はフランコ將軍ひきいる反乱軍との内戦（1936-1939）をなんとか勝ち抜かなくてはという切迫詰まった理由もアナキストの政府参加への原動力となったことも無視できないだろう。さらに人民戦線政府を支援してしかるべきソヴィエト・ロシアが、支援の条件として共産党を政府の前面に出せという要求もスペインのアナキストたちを硬直させたのだった。しかし歴史の結果は選択を許さない。鶴見俊輔は「方法としてのアナキズム」（「アナキズムと現代」に収録）の中で、「アナキズムの理念による革命は、近代の歴史において成功した実例を知らない」と断じる。この論考を読んだ青年であるわたしは梓外にこう書き込んでいた。「アナキズムは革命の起動力であり人間に潜在する可能性である」。アナキズムは政治闘争では敗北を重ねてきたが、共同体そして個人の生のありかたの潜勢力としては今でも有効と言えよう。

20歳代の頃より、読み終えた書籍には、本文用紙のタイトルページに西暦の年月日と「鮎人」という書名だけに使う二字を記すことにしている。いまわたしの手元に置いているのは、三一新書の『現代のアナキズム』（ダニエル・ゲラン著）、『現代アナキズムの論理』（同）、『アナキズムと現代』（大沢正道編）の三冊。いずれも1978年に読了したとのサインが入っている。いまから43年前、京都で過ごした学生時代の読書遍歴のひとつである。それ以来、わたしの書架にアナキズム関連書は増えることはなかったが、いまあらためてこの三冊を読み返してみると、わたしの意識回路のなかに、アナキズム的思考が沈殿していることを識るのである。若い頃より政治的な意味で興味があったのはスペイン革命におけるアナキズムの動向であった。アナキズムが「無政府主義」と訳されたその訳語がわたしの中で固着してしまい、そこから喚起される言葉のイメージから抜け出ることができなかったために、スペイン革命において、アナキスト（無政府主義者）が人民戦線政府に入閣した（1936年）その矛盾がどうしても理解できなかった。スペインのアナキズムの実態はアナルコサンデイカリズム（無政府組合主義）であったといえよう。それは、まずひとつにバルセロナやマドリッドなど産業化が進んだ地域における労働者による工場の自主管理・運営といった太い柱があり、さらには農村社会における（親

革命の起動力としてのアナキズム

国家権力を体現する政府に入閣したことに対して、当時の西欧社会のアナキスト団体から非難を浴びている。この入閣はフランコ將軍ひきいる反乱軍との内戦（1936-1939）をなんとか勝ち抜かなくてはという切迫詰まった理由もアナキストの政府参加への原動力となったことも無視できないだろう。さらに人民戦線政府を支援してしかるべきソヴィエト・ロシアが、支援の条件として共産党を政府の前面に出せという要求もスペインのアナキストたちを硬直させたのだった。しかし歴史の結果は選択を許さない。鶴見俊輔は「方法としてのアナキズム」（「アナキズムと現代」に収録）の中で、「アナキズムの理念による革命は、近代の歴史において成功した実例を知らない」と断じる。この論考を読んだ青年であるわたしは梓外にこう書き込んでいた。「アナキズムは革命の起動力であり人間に潜在する可能性である」。アナキズムは政治闘争では敗北を重ねてきたが、共同体そして個人の生のありかたの潜勢力としては今でも有効と言えよう。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.161
神戸

2021年4月25日 通巻161号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)